

予見・予防の意義②

昨年4月の校長室だより（2021・4・28）において、「予見・予防の意義」というテーマで、「人的要素が原因のかなりの部分を占める事件・事故は予見・予防の効果が高い」というようなことを述べました。しかし、実際には不幸にして事件・事故は起きてしまうことがあります。そこで重要になるのは、事件や事故が起きた原因や背景等の分析ということではないでしょうか。

ところで、私はかつて国立の青少年教育施設で指導職員として働いていたことがあります。当時、ある企画事業の講師の先生から、事故分析に関する基本的な考え方を伺いました。それは、「通常からの変化や逸脱に注目し、どの時点からその傾向が現れたかを究明するものであり、従って推定的な要因を含めず、確定事実のみを分析対象とする」というものでした。それ以来、私はできる限りこの考え方に倣い、様々な事故について時系列に辿りながら、どの時点・どの場面で人的ファクターや環境の変動要因等を排除すべきだったか、行動を変えるべきだったか、といった意識で事象を捉える習慣を持つように努めています。

但し、私はもちろん専門家ではありませんので、込み入った複雑な事故について分析することなど到底できません。従って、ここでは私たちの身近に起こり得ることで、なおかつ環境要因の変化に伴うものに絞って想定してみたいと思います。

（※太字は環境要因の変化、_____線は危険と思われる行動や状態）

想定1 雨の日の傘を差しながらの自転車走行（道路交通法や条例等により禁止）は、例えば、**強風**にあおられバランスを崩し、自動車と接触事故を起こす危険性がある。（「**天候**」という環境要因の変化）

想定2 朝のラッシュ・アワー。駅の階段等で傘を横にしながら持ち歩く人がいたとしたら、前・後の人を傷つけないか心配である。（「**時間**」「**天候**」）

想定3 夏には緑をたたえていた樹木も、冬には葉が落ち、中には剥き出しの枝が現れる。鋭利な凶器と化すこともあり得る。それが例えば、人の通る場所の目の高さにあるとしたらなおさら危険である。（「**季節**」）

以上取り上げたことはほんの一例にすぎません。実際には、もっといろいろなケースが想定できることでしょう。また、それほどの的を射たものとなっていないかもしれません。ただ、環境要因の変化等が事前に予想される時、行動を起こす前にちょっと間を置いて想像をめぐらすことが、少しでも事故を未然に防ぐことに繋がるのではないかと思います。